

演習問題 1

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

しばらくたって、いちが何やら布団ふだんの中で独り言を言った。「ああ、そうしよう。きっとできるわ。」と、言ったようである。

まつがそれを聞きつけた。そして「姉さん、まだ寝ないの。」と言った。

「大きい声をおしでない。私いいことを考えたから。」^① いちはまずこう言って妹を制とどめておいて、それから「小声でこういうことをささやいた。お父っさんはあさって殺されるのである。^② 自分は、それを殺させぬようにすることができると思う。どうするかというと、願い書というものを書いてお奉行様に出すのである。しかしただ殺さないでお願いしたい。私ども子どもを殺してくださいと言って頼むのである。それをお奉行様が聴いてくださって、お父っさんが助ければ、それでいい。子どもは本当に皆殺されるやら、私が殺されて、小さい者は助かるやら、それはわからない。ただお願いをする時、^④ 長太郎ちやうたろうだけは一緒に殺してくださいと書いておく。あれはお父っさんの本当の子でないから、死ななくてもいい。それにお父っさんがこの家の跡を取らせようと書いていらっしやったのだから、殺されないほうがいいのである。いちは妹にそれだけのことを話した。

「でも怖いわねえ。」と、まつが言った。

「そんなら、お父っさんが助けてもらいたくないの。」

「それは助けてもらいたいわ。」

「それなら。まつさんはただ私についてきて同じようにさえていればいいのだよ。私が今夜願い書を書いておいて、あしたの朝早く持っていきましようね。」

いちは起きて、手習いの清書をする半紙に、平仮名で願い書を書いた。

父の命を助けて、その代わりに自分と妹のまつ、とく、弟の初五郎はつごろうをおしおきにしていただきたい、実子でない長太郎だけはお許しくださいるようにというだけのことはあるが、^③ どう書きつづていいかわからぬので、幾度も書きそこなって、清書のためにもらった白紙が残り少なくなった。しかしとうとう「一番鶏の鳴く頃に願い書ができた。」

願い書を書いていううちに、まつが寝入ったので、いちは小声で呼び起こして、床の脇に畳んであったふだん着に着替えさせた。そして自分も支度をした。

女房にようばと初五郎とは知らずに寝ていたが、長太郎が目覚まして、「姉さん、もう夜が明けたの。」と言った。

いちは長太郎の床のそばへ行つてささやいた。「まだ早いから、おまえは寝ておいで。姉さんたちは、お父っさんの大事なご用で、そつと行つてくる所があるのだからね。」

「そんならおいらも行く。」と言って、長太郎はむっくり起き上がった。いちは言った。「じゃあ、お起き、着物を着せてあげよう。長さんは小さくても男だから、一緒に行つてくれれば、そのほうがいいのよ。」と言った。

女房は夢のようにあたりの騒がしいのを聞いて、少し不安になって寝返りをしたが、目は覚めなかった。

三人の子どもがそつと家を抜け出したのは、二番鶏の鳴く頃であった。戸の外は霜の曉あけぼのであった。提灯ちていを持って、拍子木をたいてくる夜回りのじいさんに、^⑦ お奉行様の所へはどう行ったら行かれようかと尋ねた。じいさんは親切な、ものわりのいい人で、子どもたちの話を真面目に聞いて、月番の西奉行所のある所を、丁寧ていねいに教えてくれた。

〔森鷗外「最後の一句」より〕

□ (1) 線①「小声でこういうことをささやいた」とありますが、いちがささやいた内容が書かれている部分を本文中から探し、その最初と最後の六字(句点も字数に数えます)で書き抜いて答えなさい。

□ (2) 線②「自分は、それを殺させぬようにすることができると思う」とありますが、いちは、具体的にどのようにしようと考えていますか。次の文の□に入る適切な言葉を、aは十四字、bは三字で本文中から書き抜いて答えなさい。

「お父っさんを助けて、その代わりに□a□と書いた□b□をお奉行様に出す。」

b	a

□ (3) 線③「私ども子ども」とは、誰のことですか。その名前をすべて書いて答えなさい。

□ (4) 線④「長太郎だけは一緒に殺してくださいと書いておく」のはなぜですか。本文中の言葉を用いて、二つ書いて答えなさい。

□ (5) 線⑤「それは助けてもらいたいわ」とありますが、誰を助けてもらいたのですか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア お父っさん イ いち
ウ まつ エ お奉行様

□ (6) 線⑥「どう書きつづていいかわからぬ」、^⑦「お奉行様の所へはどう行ったら行かれよう」の表現は、物語の展開上、どのようなはたらきをしていますか。次から最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 父の身代わりに死んでもよいという思いを、内心では何かの口実を作って中止したいと願ういちの内面を示すはたらき。

イ いちが父の命を助けようと思ったことは単なる思いつきで、計画性に乏しく実現しないことを暗示するはたらき。

ウ いちには父の命を助けたいという思いはあるものの、その方法はあまりに幼稚で現実性に欠けることを指摘するはたらき。

エ わからないことばかりだが、どうにかして父の命を助けたいといういちの一途な心情を印象づけるはたらき。

□ (7) 本文の内容として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア いちがほとんど寝ずに父の命を助けてほしいという願い書を書いている間、母は夢の中で騒ぎを感じたものの、実際には起きなかった。

イ いちは、父の命を助けてほしいという願いを奉行に出す決心をしたものの、子どもたちの中で自分ひとりだけが殺されることは怖いと思った。

ウ まつは、子どもたちが父の身代わりになろうといういちの思いつきにいったんは同意したが、その後怖くなってやめたいと言いつづけた。

エ 長太郎は、いちに父の助命嘆願の話を聞いて、自分は実子ではないので関わりたくないと考えたが、男だという理由で奉行に伴った。